

東日本大震災から4年目。福島県南相馬市やいわき市の仮設住宅地内など同県浜通りに、あずまや風の「心の駅」が計7カ所設置され、被災者らが集まって茶菓を分け合い談笑する。「心の駅」は、日本風景街道「よりみち街道『中越』」の中心メンバーとして活動するNPO法人「おぢや元氣プロジェクト」が開設した。

同NPOは、2004年10月に発生した新潟県中越地震の被災地・小千谷市で震災後に市民有志らが立ち上げた。メンバー30数人はほとんどが中越地震の被災者。理事長の若林和枝さん(54)も家屋が半壊し、大けがを負った母も含め一家5人が2カ月間、避難所暮らしや車中泊を余儀なくされた。

「たくさんの方々に救っていただき、ありがたさを骨身にしみて感じたので、東北の惨状にいたたまれず、少しでもお役に立てればと思いい立ちました」と語る。

東日本大震災時は、発災当日から食料などを準備し2日後から救援物資を福島県内にある多くの避難所に届けた。

日本風景街道

よりみち街道「中越」が震災癒やす「心の駅」



南相馬市の「心の駅」(右)と里山再生よりみち大学



元氣を取り戻せない被災者が多いのを見て同年夏から順次「心の駅」を設置、福島・浜通り地区には60回以上通い続ける。

「心の駅」は、心の傷を癒すには少しでも人と触れ合い話し合い、心を通わせることが大切と気付き、NPO発足時から実践。07年の新潟県中越沖地震の際も柏崎市内などに移動式の「心の駅」を開設して感謝された、NPOの原点事業だ。

防災頭巾も開発

また、体験を活かし「日本防災用品研究会」も発足。外出時の災害に備える目的の携帯用防災頭巾「おまもり頭巾ちゃん(15面プレゼント参加照)」を開発、特許庁へ登録した。普段はB5サイズの薄くて軽い「ポーチ型」。ファスナーを開くとワンタッチで頭から首まですっぽり被れる「防災頭巾」に早変わり。竜巻や暴風雪、地震、火山噴火

時も火山灰から身を守る画期的な防災グッズだ。アウトドアライフにも利用できる携帯用トイレなど商品は発想が新しく、同NPOのHPで購入できる。

「よりみち街道『中越』」の活動も、こうした活動を通じて人と人のつながりを大切にすることが原点だ。「美しい棚田や闘牛で知られながら中越地震で壊滅状態になった中山間地域の復興に、風景街道の活動が効果を発揮しています。観光客が増えるにつれよ

ようになりました」と若林さん。

日本風景街道の活動を機に地域の産官学民が心を一つに知恵や技術を結集することで、まちに新しい魅力を創生できる。当たり前と思っていた里山の風景や生活、伝統文化もうまく活用すれば、都市の人々には魅力ある「宝」の地域なのだ。

震災からの復興を願い取り組んだ風景街道の活動から、都市と里山の交流事業「里山再生よりみち大学」も生まれた。首都圏の小学校から親子連れが参加する稲刈り体験だ女の子が「農家にお嫁に行きたい」と言い出し、野菜嫌いの男の子が「このナスおいしいの男の子が」と喜んで食べる。家族はもちろん、農家や若林さんからNPOスタッフも歓声を上げる。

心のつながり大切

若林さんが災害時に強く感じるのは「人と人、心と心のつながりを大切にすること」。道が果たす役割の重要性だ。道が通じて初めて避難できライフラインも確保、支援も手が届く。命を守るのに必要な物資輸送や避難経路などを確保し、道を通じさせるのが大前提。風景街道推進にも基盤となる道はどうあるべきか近隣の「道の駅」とも知恵を絞っている。

「おまもり」は、日本の象徴富士山をモチーフに、歴史や文化が道路を介して未来へと続いていくことへの願いをこめて表現した。